

ソーシャルワークにおける社会構成主義の意義と課題 エンパワメント実践との関連から

西梅幸治¹

(2017年9月27日受付, 2017年12月15日受理)

Significance and Issues of Social Constructionism in Social Work Practice :
Related to Empowerment Practice

Koji NISHIUME

(Received : September 27, 2017, Accepted : December 15, 2017)

要 旨

わが国において現在, ソーシャルワークにおける社会構成主義は, 理論と実践の両側面において重要な位置を占めている. このポストモダンの理論的枠組みとしての社会構成主義は, 利用者の生活を肯定的な側面から捉えなおし, ミクロからマクロを見通して協働展開するエンパワメント実践にも大きな影響を与えている. 本論では, この社会構成主義に着目し, ソーシャルワークへの導入背景, その理論的枠組みから展開されるアプローチについて整理する. それをふまえてソーシャルワークにおける社会構成主義がエンパワメント実践にどのような影響を与えているかを考察する. その結果, 社会構成主義に基づくソーシャルワークは, エンパワメント実践と関連して, 8点の特徴が示す意義と課題が明らかとなった.

キーワード: ソーシャルワーク, ポストモダン, 社会構成主義, エンパワメント

Abstract

Recently, the theoretical perspective of social constructionism is considered important in social work theory and practice. Social constructionism as the theoretical framework of the postmodern has great influence on empowerment practice in which social worker re-constructs the life of the client from the strengths perspective and collaborates with the client foreseeing from micro to macro practice. The purpose of this paper is primarily to analyze the significance and issue on social constructionist perspective having effect on the empowerment practice, by describing historical background of social constructionism in social work and referring to some practice approaches based on this perspective. As a result, it has become clear the significance of 8 characteristic elements and some issues relating to empowerment practice in social work.

Key Words: social work, postmodern, social constructionism, empowerment

¹ 高知県立大学社会福祉学部社会福祉学科・准教授・博士(福祉社会学) Department of Social Welfare, Faculty of Social Welfare, University of Kochi, Associate Professor (Ph. D.)

I. はじめに

ソーシャルワークの理論と方法は今日、利用者の生活状況の複雑化や問題の深刻化、さらには理論や方法の背景にある思想などに応じて多様化してきている。とりわけ現在では、モダンとポストモダンという文化・科学・芸術などを含めた思想的潮流がソーシャルワーク方法論にも大きな影響を与え、モダンからポストモダンへ移行しながら多様な理論と方法が議論されている。そのなかでも今日、ポストモダンの潮流下にある社会構成主義が大きな影響を与えてきている。

モダンという言葉と関連する近代をふり返ってみると、人間や社会の進歩が約束されており、論理性・客観性・普遍性を追究する科学によって前進してきた。近代という世界とその進歩を理解する絶対的な思考的方法に覆われ、そう考えることが真実であるという大きな価値観により世界が支配されてきた。ソーシャルワークも同様に、このような大きな思想的潮流のなかに深く根ざしてきた。論理性という主張が明快で首尾一貫していることや客観性というある事象が誰からみても明らかな事実として存在していること、さらには普遍性という適用範囲がこの上なく広く例外なしにいつでも当てはまることが重視されてきたのである。

しかしポストモダンの思考は、論理性、客観性、普遍性を追求してきたモダン思考を懐疑する。現実、観察者から独立して成立せず、そのため知識は、客観的真実を表すというよりはむしろ相互主観的で、観察者集団の言説から成り立っている。すなわち現実、相互主観的であり、言語が社会的現実を構成していることを保持する立場である。そして多義的な曖昧さや例外にむしろ焦点化して見ることを重視するのである。社会構成主義は、このような現実への理解を促す理論的枠組みであり、視座といえ、医療、心理、教育、ビジネスなど幅広い領域で関心が高まるなか、ソーシャルワーク領域でも重視されてきているといえよう。

そこで本稿では、その意義と課題について論考してみたい。特に社会構成主義が大きな影響を与えているエンパワメント実践との関連性から検討していく。なぜならエンパワメントは、2014年の国際ソーシャルワーカー連盟によるソーシャルワークの新しいグローバル定義でも従来と変わらず、その中核概念であり、実践展開の主軸であるからである。そのため本論では、ソーシャルワークにおけるエンパワメント実践の観点からの社会構成主義の意義と課題を明確にしていきたい。

II. ポストモダンとソーシャルワーク

1. ポストモダンの潮流

ポストモダンは、1950年代以降の米国で、主に建築や文芸批評、そして社会科学の分野で使われ始め、1980年代にはポストモダニズムが広く使用されるようになり、仏国の哲学者 Lyotard, J. F. によって、現代を考えるうえでの主要な概念として提起された。厳密に言えば、Lyotard (=1986: 7) は「高度に発展した先進社会における知の現在の状況」をポストモダンと呼んでいる。モダンとして表現される近代は、ルネッサンスに始まり、啓蒙時代に発展した。人間を中心におき、理性と合理性、それによる科学を通じて真理を探求し、進歩を遂げてきた時代と関連している。しかし1945年のヒロシマに象徴される現実を目の当たりにするなかで、合理性と科学による人類の普遍的進歩には大きな疑問を抱かざるを得なくなった。このような真理や進歩という近代の信念が維持できなくなった状態をポストモダンは表現しているといえよう。

Burr, V.によると、究極的な真理が存在し得るという考えと、私たちにみえる世界が隠された構造の結果であるという構造主義の考え方、これら両者への拒否が、知的な運動としてのポストモダニズムである (Burr2003: 11)。そして同時に、世界がグランド・セオリーやメタ・ナラティブによって理解され得るという考えを拒否し、その代わりに、多元主義としても言及される生活に関する多

様で変化に富んだ状況依存的な考え方の共存を強調する（Burr2003：12）。このように20世紀後半に生じたポストモダンとは、産業化から脱産業化・情報化、生産論理から消費論理の社会へという社会構造の変動に対応するような思想的潮流といえよう。それは、モダニズムに支配された世界に懐疑し、普遍性への探求に価値を見出さず、周辺の経験や差異を認識しようとするものである。

ソーシャルワーク領域では、例えば Poulin, J.によると、18世紀以降の啓蒙思想の影響を受けながら、経験主義と科学的なアプローチに支配されてきた、いわばモダンのソーシャルワークは、経験主義、客観性、中立性を備えた論理実証主義を重視してきたことが述べられている。そして同時に、ソーシャルワーカーが利用者の問題解決へのエキスパートであり、中立的で価値自由な参加者として階層的な関係を保ち、優れた知識によってアセスメントと診断を行ってきたことが指摘されている（Poulin2010：29-30）。また Laird, J.によると、モダニストとしての実践家は、専門職としての倫理綱領に明確に表現されているものを除いて価値を排除していると指摘されている（Laird 1995：152）。

一方でポストモダンの状況下においては、価値と現実を切り分けることができず、また現実が観察者と無関係にあるという見方ではなく、ある見方が社会的現実を構成していることや、知識や理解に関する代替的な思考方法があること、個人の認識がコミュニティや社会環境によって影響を受けていること、個人が他者との相互作用から切り離せないことなどが、ソーシャルワーク領域においても強調されている（Poulin2010：31）。

2. 社会構成主義の概要

今日、従来の科学的方法とは一線を画し、ポストモダンの動向の一つである社会構成主義という理論的枠組みに注目が集まっている。社会構成主義については、Berger, P. L.らによる現実の社会的構成にみられる現象学的社会学が主な契機の一

つとされている（Berger ら=2003）。特にソーシャルワーク領域への導入には、Gergen, K. J.を中心とした社会心理学からの影響が大きいといえる（Gergen1999）。この理論的枠組みに基づくと、自然や自己に関する正確で客観的な説明であるといふ内容は、社会過程の産物であると捉えられる（MacNamee ら1992：4）。ケースの説明は、私たちが生活のなかで用いる言語体系によって導かれたり、制約されている（MacNamee ら1992：4）。そして社会構成主義は、理解の代替的な形式に未来を拓く批判的な自己反省に誘うことが指摘されている（MacNamee ら1992：5）。わが国でも杉万俊夫らが、Gergen らの提唱する社会構成主義からみる実体について、「実証の学に代えて、実践の学を志向する。流動する関係的世界こそ、何にも先行する基底的存在である。私たちが、通常、既に外在すると信じている現実世界は、実は、関係の世界に作動する社会的構成の産物に他ならない」と紹介している（杉万ら2003：70）。

この社会構成主義の特徴を Burr は、

- ①自明の知識への批判的スタンスをとること
- ②知識の歴史的、文化的特殊性を認識すること
- ③知識が社会的相互作用の過程によって維持されること

④知識にともなう社会的行為が成立することの4点から大きくまとめている（Burr2003：2-5）。そして伝統的な心理学との相違について、反-本質主義、實在論への懐疑、知識の歴史的、文化的特殊性、思考の前提条件としての言語、社会的行為の一形態としての言語、相互作用と社会的慣行への焦点化、過程への焦点化の7点を挙げている（Burr2003：5-9）。

また Gergen は、社会構成主義に関する仮説として次の4つを指摘している（Gergen1999：47-50）。

- ①私たちが自身の世界や自己を理解するための言葉は、そこにある事実を必要も要求もしない
- ②記述や説明及び表現の様式は、関係性に由来

する

③私たちが記述，説明，表現するように，私たちの未来は形づくられる

④私たちの理解の形式に関する反省が未来の福利に不可欠である

このような仮説からは，言語を通じた①事実の相対性，②関係性に基づく現実の構成，③意味生成の過程，④対話と自省を強調しているといえよう。

3. 社会構成主義のソーシャルワークへの導入

ソーシャルワークがポストモダンや社会構成主義に関心をよせてきたのは，例えば Hartman, A. の研究にみることができる (Hartman1990 : 1991)。Hartman (1990) は，知識が研究者や実践者だけではなく，利用者の貢献がなければ発展してこなかったことを指摘した。さらにソーシャルワークの関心の広さと深さは，単一の理論だけでは補いきれないと主張したのである。そこで従来の科学的方法とは一線を画し，客観性や普遍性を懐疑する社会構成主義に着目したのであった。そしてポストモダニストについて，言葉が世界を表すだけでなく，形づくっており，その定義や記述，そして解釈なしに，私たちの世界を形成することができないことを信じていると指摘している (Hartman1991 : 275)。

既述のとおり社会構成主義は，世界が客観的観察から生み出されるのではなく，人々の社会的な相互作用によって生み出されるという，社会的に構成される現実を重視するポストモダンの潮流から登場した perspective として理解できる。perspective，すなわち視座もしくは理論的枠組みとして考えられる理由は，Burr (2003 : 2) によっても社会構成主義の立場を特定する一つの形態は存在せず，彼女が示す4つの特徴のうち一つでも基礎にもつアプローチであれば，社会構成主義として考えることができると解説されていることから単一の理論そのものというよりは枠組みとして理解するほうが適切であると考えられよう。そ

の社会構成主義の臨床的応用がナラティブモデルであり，それに依拠する研究者たちは，システム思考（システム論，ライフモデル，エコシステム論）に替わる可能性を秘めた新しいモデルであると主張している（木原 2003 : 168）。

さらに社会構成主義に基づくセラピーについて，例えば Gergen (1999 : 169-170) によると，①意味への焦点化，②共同構成としてのセラピー，③関係性への焦点化，④価値への感受性，を重視している。このような社会構成主義に基づくアプローチは，主に利用者との会話や対話をとおしたその考え方を背景にする臨床的応用であり，MacNamee ら (1992) や Gergen (1999) によって，Anderson, H. と Goolishian, H. の無知のアプローチ，Anderson, T. のリフレクティング・チーム，そして White, M. and Epstein, D. のナラティブ・セラピー，de Shazer, S. や Berg, I. による解決志向アプローチなどが積極的に紹介されている。それらは今日，わが国のソーシャルワーク領域においても広く認識されているところである。そこで次に，それらのアプローチの概要をみていきたい。

Ⅲ. 社会構成主義に基づく展開

1. 無知のアプローチ

無知のアプローチは，ヒューストン・ガルヴェストン研究所において，家族療法を中心に展開してきた Anderson と Goolishian によって提唱されている。言語を進展させながら，問題そのものに特有な意味，問題をめぐる編成や解消に特化して従事するというセラピーを通じた言語システムへの着目に起因している。そこでは，治療関係や治療システムについて，問題を編成しながら問題を解消していくシステムとして捉え，従来の考え方を転換してきた (Anderson ら1988)。このアプローチではまず，人間の行為が社会的な構成と対話を通じて創造されることを理解していくために，クライアントの現実のなかで生じる見方を重視する (Anderson ら1992 : 26)。

そしてこの立場から、人間はその経験を意味づけ、編成した社会的に構成された物語的な現実を通じて生きるとともに、その生活を理解すると考えるのである（Anderson ら1992：26）。その前提は、Anderson らによって以下のように解説されている（Anderson ら1992：27-28）。

- ①人間というシステムは、言語と同時に意味を生成するシステムである
- ②意味と理解は、社会的に構成される
- ③セラピーにおけるどのようなシステムもいくつかの問題をめぐる対話によって結合する
- ④セラピーは、治療的会話と呼ばれるものの中から生じる言語的な出来事である。
- ⑤セラピストは、会話の芸術家、対話過程の建築家としての役割を担い、その専門性は対話的会話の空間を創造し、促進することである
- ⑥セラピストは、会話的で治療的な質問を用いて、治療を芸術として進める。
- ⑦セラピーで扱う問題は、私たちの力や解放の感覚を損なうような形で表現された物語である
- ⑧セラピーにおける変化とは、新しい物語という対話的創造性であり、新しい行為者としての機会に開かれていることである

この無知のアプローチでは、Anderson ら（1992）の論文のタイトルにもなっているように「クライアントこそ専門家である」ことをテーマとしている。そこには、専門家が専門的知識を用いてクライアントの認識を定義してしまうことに対する懐疑が前提にある。そこでセラピストは、クライアントに対して無知であるという姿勢で、クライアントが話すことからもっと多くのことを教えてもらうという態度で臨むのである。そのためにセラピストは、クライアントとの治療的会話を促進し、治療的会話の参与観察者であり、参与促進者となる。そしてセラピストは、クライアントが問題に関する会話によって新しい意味を発展させ、問題を解消していくために、このような役割を担いながら対話を続けるのである。

この手法は近年、Anderson によってコラボレイティヴ・セラピーやコラボレイティヴ・アプローチとして体系化されつつある（Anderson2007）。そこでは技法というよりも哲学的な態度を重視し、セラピーで出会うクライアントとともに考え、体験し、関係を持ち、行動し、そして反応するという関係と会話におけるあり方について言及している。

2. リフレクティング・チーム

次にリフレクティング・チームは、ノルウェーの精神科医でトロムソ大学の社会精神医学教授であった Anderson, T.を中心に展開された手法である（Anderson1988）。この手法は、家族療法の一つであるミラノ派のシステムズ・アプローチによる治療構造を再構成した点に特徴がある。一般にミラノ派の治療では、治療者がクライアントやその家族と面接する面接室の他に、それをワンウェイ・ミラー越しに眺めるチームの観察室がある。そこでチームは、面接室を観察しながら治療者に指示を与えて治療を行うのである。これに対してリフレクティング手法では、そのチームのメンバーが治療者とクライアントの面接から受けた印象や解決策をクライアントに提示するという手法で治療が行われる。この手法は、治療者もクライアントと対等であり、治療過程を統制しないことにより、ミラーの後ろで何を考えているのか不審に思っていた家族にとっても、好印象であることが指摘されている（Anderson1988：427）。

1985年に Anderson らは、家族と面接者の治療的会話をワンウェイ・ミラーの背後から会話を聞いていたチームに対して、すべてをオープンにするため聞いていたことについて話し合うようにと提案したのである（Anderson1992：58）。すなわち従来の面接室と観察室2室の役割が逆転し、チームの指摘のなかからクライアントが必要だと思ふことを取り上げて面接を続けるという方法を導いたのである。そこでは、①非日常的な差異を持ち出さないこと、②「あれかこれか」から「あ

れもこれも」へ、③会話の流れに沿って（質問することとその場にいること）などが手順を進めるなかで重視される（Anderson1992:58-63）。またそこでは、以下に示す3つのルールを設けている（Anderson1992:60）。

- ①チームの反応は、他の文脈からではなく、その場の会話を通じて表現されたことから始めること
- ②家族が聞いている公の会話では、否定的な意味合いの話を自制すること
- ③家族もチームも同じ部屋で行う場合、チーム員同士は向き合って話し、聞き手に聞かなくてもいい自由を与えること

このリフレクティング・チームでは、可能な限り多くの見方を取り入れるように、①ミーティング開始時にする2つの質問、②この話し合いについて話し合うこと、③過去や未来について話し合うこと、④内的な対話と外的な対話などが実践されるのである（Anderson1992:61-63）。特に例えば専門職がグループの一人と話し、次に聞き手だった他の人たちに今の話の感想を求める。そしてその感想を聞いた後、もう一度最初の人に戻り、他の人たちが話したことを通じて何を考えたかを尋ねる。このように2つの立場を移り変わって行う話し合いを、リフレクティング・プロセスと名づけ重視している（Anderson1992:63）。このプロセスによって、自分自身との語らいである内的な対話と他者との語らいである外的な対話の転換とその過程を提供できるのである。

3. ナラティブ・セラピー

White と Epstein は、それぞれオーストラリアとニュージーランドで活躍するなかで1980年代にこのセラピーを開発した。その特徴はまず、クライアントとその症状を意図的に分離していく点にみられる。クライアントから症状を切り離す外在化技法によって、問題の原因をクライアントに求めるのではなく、問題がクライアントにどのような影響を与えているのかを考えることができる。

外在化とは、「人々にとって耐えがたい問題を客観化ないし人格化するよう人々を励ます一つの治療的接近法」である（White ら=2017:53）。そして「家族が彼ら自身とその人間関係を問題から引き離すよう援助するなかで、外在化は、問題のしみこんでいない新しい見方で彼らそれぞれが自身と人間関係を記述する可能性を開く」方法である（White ら=2017:54）。

このことをふまえ、次の6点からなるセラピーの特徴を示すことができる（White ら=2017:54-55）。

- ①誰が問題に対して責任があるのかという論争も含め、人々の間の非生産的な葛藤を減らす
- ②問題解決の試みにもかかわらず存続する問題のために、多くの人々がもつに至った挫折感を帳消しにする
- ③人々が互いに協力し、問題に対して一致団結して立ち向かい、そして人生や人間関係に対する問題の影響から身を引く方法の基礎を築く
- ④人々が、問題やその影響から彼らの人生と人間関係を取り戻す新しい可能性を開く
- ⑤「恐ろしくシリアスな」問題に対する軽やかでより有効な、さほど緊張しなくて済むアプローチの自由を与える
- ⑥問題についてのモノログよりもダイアログを提供する

そしてこの立場は、問題の影響を多大に受けているというような、これまでクライアントの認識内で優勢であったことが語られたものをドミナント・ストーリーと呼び、クライアントはそれに支配されているとみなす。そして治療は、そのドミナント・ストーリーからはずれたところにあるユニーク・アウトカムに着目し、新しいストーリー（オルタナティブ・ストーリー）を対話によって引き出すことが行われる。その際に用いられる特徴的な技法については、①外在化する会話、②再著述する会話、③リ・メンバリングする会話、④定義的祝祭、⑤ユニークな結果を際立たせる会話、

⑥足場作り会話などがあり、ストーリーの再構築がクライアントとセラピストの協働を通じて展開される（White ら＝2009）。

4. 解決志向アプローチ

解決志向アプローチは、米国の Brief Family Therapy Center における実績に基づいて、de Shazer や Berg によって体系化された。このアプローチの基本的な前提は、問題解決のための鍵や糸口となる問題の例外、そして問題よりもうまくいった解決を中核においた行動に焦点をあてることである（Berg1994：x）。問題が生じているにもかかわらず、それが起こっていない利用者の生活の時や機会を、例外という言葉で定義したり、利用者が奇跡をイメージすることに焦点をあて、現実的で達成可能なステップを形づくりながら支援を展開するのである。すなわち問題の原因ではなく、利用者自らの解決イメージを重視し、短期間で実現する未来志向の支援といえよう。

この解決志向の方法と社会構成主義との関連については、Berg ら（1996：388-390）が8点に整理している。

- ①現実の社会的構成への信念
- ②個人の意味づけを表現し構成する媒体としての言語
- ③利用者は新しい意味づけの発見をとおして変化する
- ④専門家としての利用者、一歩後ろから導く専門職
- ⑤協働的な姿勢をとること
- ⑥自省の活用
- ⑦利用者のストレングスの強調
- ⑧解決は共同構成される

具体的にこのアプローチではまず、①うまく機能しているなら、変える必要はない、②うまくいっていることが分かったら、もっとそれをせよ、③うまくいかないなら、二度とするな。何か違うことをせよ、という3つのルールを重視している（Berg1994：15-16）。

そしてクライアントとセラピストの関係に注意を払い、ビジター関係、コンプレイナント関係、カスタマー関係というタイプに区別している。そのうえで関係を築き、維持していく役割を等しく分担していることを意識しながら、ジョイニングを通じて協働を発展させていく。このアプローチでは、クライアントとの好ましい関係を確立しながら、変化を必然と捉え肯定的な変化を強調し、解決をもたらす質問を通じて様々な介入を展開するのである。

その解決志向の面接では、De Jong, P.らによると、①利用者の言及する枠組みのなかで利用者とともに的確なゴールを進展すること、②例外を基盤とした解決を利用者とともに発展させること、の2側面からなると指摘している（De Jong ら1995：729）。そしてそのゴールは、7点に渡って示されており、表1¹のように整理できる。解決志向のアセスメントでは、問題が常に問題であるとは限らないと考える。クライアントと治療者は、問題が起こっていない時や場所、関係性などそれまで気づいていなかった部分について話し合い、解決を目指して面接を展開するのである。そこでは特に、解決を引き出すための過去の成功やセッション前の変化を尋ねる質問、例外をみつけるための質問、ミラクル・クエスチョン、スケーリング・クエスチョン、コーピング・クエスチョンなどの質問法に対する有効性が強調されている（Berg1994：85-117）。

IV. エンパワメント実践に関連する社会構成主義の意義と課題

1. 社会構成主義に基づくソーシャルワーク

このような社会構成主義に基づく実践展開は、今日のソーシャルワークに導入され、大きな影響を与えている。例えばLaird, J.は、ポストモダン時代の家族中心実践において、社会構成主義の適用により、知識と価値の役割、問題の定義や利用者の捉え方ならびに変化の構成、利用者とソーシャルワーカーの関係、アセスメントとインター

ベンション、そして評価の観点からその変化について議論している。知識の権力性や文化的特殊性を認め、価値自由の限界、そして世界が言語を介して創られることにより、実践展開に特徴が現れると指摘されている (Laird 1995)。

そこでは、既述のアプローチを引用しながら、問題が言語のなかに存在し、問題となるナラティブやストーリーの解消もしくは再ストーリー化が実践の焦点となることが指摘されている。そして利用者は、内面に問題を抱えているというわけではなく、問題としてみなされる状況を言語化することを探求している人が対象となる。その利用者との関係は、ソーシャルワーカーの無知の姿勢から参加と協働を促す形態になる。また従来のアセスメントやインターベンションなどの問題解決過程による実践は、協働と再帰性、そして多様性の観点から変更され、新しい意味や可能性の生成に向けて会話を通じて展開されるのである。

次に Witkin, S. L.は、ソーシャルワークが社会

構成主義から影響を受けていることを整理している (Witkin2012: 29-33)。それは、①代替的な言説の重視、②文脈的理解の強調、③価値の必然性と重要性への認識及び感受性、④多義性の促進、⑤事実とみなされることや当然とされることへの問い、⑥より人道的な社会秩序を生み出すことへの関心、⑦社会という言葉の使用と意味づけ、⑧科学への順応と研究における表現、の観点から議論されている。また Blundo, R.らは、社会構成主義の基本的な仮説とそれに基づくソーシャルワーク実践における一般的な指針と利用者に取り組む際の指針について、表2²のように整理している (Blundo ら2008)。そこでは同様に、利用者の生活への語りを重視し、そのナラティブやストーリーから新しい意味の創造に向けて実践する。そしてソーシャルワーカーが無知の姿勢を重視して利用者とともに協働による実践過程を展開することの重要性が指摘されている。

表1 解決志向面接の7つのゴール

①	ゴールは、利用者にとって重要である。ゴールは、利用者に属し、利用者の言葉で表現される時にうまく形作られる。まず第一にゴールがワーカーによって考えられ、ワーカーのカテゴリーのなかで表現される時には、うまく形成されない。この特徴は、ゴールを尊重された利用者がゴールを見過ごされた利用者よりもより動機づけられるという信念に基づく実践原理を構成する。
②	ゴールは、小さいものである。小さいゴールは、大きなものより達成することが容易である。例えば、仕事に就くよりも就職志願書に必要事項を記入することのほうが容易である。
③	ゴールは、具体的で、明確で、そして行動的なものである。そのような特徴をもつゴールは、利用者とワーカーに進展が生じていることへの理解を可能にする。そのため「一週間に2回友人と昼食に出かけること」は、「他の人よりも関係をもつこと」より望ましい。
④	ゴールは、無くすことよりもしたいことを探求する。利用者は、ゴールについて尋ねられたとき、しばしばワーカーに生活から取り除きたいもの、例えば失望した感情など、について話す。実践の結果は、利用者がゴールを何かしたいこと、例えば散歩すること、として表現する時に向上する。
⑤	ゴールは、終えることよりも始めることにする。利用者は、まずゴールを終着点、例えば幸せな結婚生活を送るなど、として形成する。ワーカーは、ゴールを達成していくことが過程であることを意識して利用者が望む結果への最初の一步を形作ること、例えば夫に次の夏休みを過ごす場所を選ぶように頼むこと、を励ますことによって支援を行う。
⑥	ゴールは、利用者の生活のなかで現実的なものにする。この特徴は、自明のことであり、たいてい上記のゴールを達成する間に無意識に達成される。しかしながら現実的であるかどうかの不確かな時には、ワーカーは、この特別なゴールが利用者にとって意味があることを話し合うことで、利用者とともに生活について探求することができる。
⑦	ゴールは、熱心に取り組むにつれて利用者によって確認される。ゴールについて考えるように利用者を励ますことは、現実的で利用者の尊厳を守るために有益である。そのことが現実的なのは、ゴールが利用者の変化を必要とするからであり、そうでなければ変化が難しいからである。利用者の尊厳を守ることになるのは、まず第一に利用者がゴールを達成したならその達成度が顕著であり、もし達成しなかった場合でも、さらに取り組むべきことがあることのみを意味するからである。

2. エンパワメント実践への影響

次に社会構成主義に基づくソーシャルワークをエンパワメントとの関連性からみていきたい。Parton, N.らは、White らのナラティブ・セラピーや de Shazer らの解決志向アプローチを参考にしながら構成的ソーシャルワークを開発している（Parton ら2000）。そのなかでは、社会構成主義の理論的志向性がエンパワメントの重要性も含むことを指摘している。そして例えば、Saleebey, D.らによって確立されているストレンクス視点からのソーシャルワーク実践においても、同様に社会

構成主義とそれに基づくアプローチの影響を受けている（Saleebey 2006）。社会構成主義に基づくストレンクス視点からの実践では、従来の利用者の病理や問題を解決するための援助ではなく、ストレンクスに着眼点を転換した支援展開となる。すなわち、利用者自身の強さの自省的な理解とソーシャルワーカーとの協働を通じて、利用者の生活に関する意味づけの再構成や転換を行いながら実践することになる。一方でこのストレンクス視点やエンパワメントについては、解決志向アプローチなど社会構成主義に基づくアプローチの根拠や

表2 社会構成主義の基本的な仮説と指針

基本的仮説
<ul style="list-style-type: none"> ・生物学的な有機体としての人は、受容する刺激を区分して分類するために生物学的な原理を顕在化する。 ・人々は、他者との相互作用や環境での活動をとおして、時間を越えて積極的に意味を構成し、創り出す。 ・言語は、活動の特殊な形態である。言語を通じて、人々は出来事に対して熟考し、自己評価し、個人的な意味づけを構築できる。人々は、新しい現実が人間としての統合性を崩壊させないように、オルタナティブな意味づけを考えることができる。 ・感情と認知は、人生やその瞬間の文脈における個人的な意味づけに関連して現れる。 ・核となる個人的な意味づけの構築と再構築は、自己の感覚として経験される。 ・自己の感覚は、意味づけの中核として再構築され、人生のナラティブは、書き換えられる。 ・意味の編成や言語の使用は、共同社会における活動の形態である。それゆえ人々は、意味のシステムとしての文化を発展させる。社会文化システムは、社会的な交換を通じた動的な意味処理システムである。
一般的な指針
<ul style="list-style-type: none"> ・利用者とその生活の文脈におけるユニークさを無条件に尊重する姿勢をとること。 ・利用者による生活への語りや予想された問題に関して好奇心と関心をもつこと。 ・構造と方法によるセラピーの文脈がその機能を承認するコミュニティの価値や信念を反映していることを認めること。 ・利用者が自己とその世界を知っているという感覚を強化する手段として利用者の個人的現実やその維持を尊重すること。 ・問題が協働的理解、分かち合われた意味、そしてオルタナティブな意味の発生の結果として解決されることを認識すること。 ・セラピーは、利用者とソーシャルワーカーの意味づけの絶え間ない交換を含んでいること。 ・インターベンション過程は、利用者とソーシャルワーカーによって分かち合われたオルタナティブな意味に寄与する状況を提供すること。
利用者と取り組む際の明確な指針
<ul style="list-style-type: none"> ・利用者がいるところからはじめ、利用者とともに立ち止まること。 ・無知の姿勢を維持すること。 ・利用者の発言や意味づけを理解していると決めつけないこと。 ・利用者の説明や理解、もしくは意味づけを必要とすること。 ・物語、ストーリーを構成すること。 ・利用者の内在的な文脈に取り組むこと。 ・利用者の外在的な文脈に取り組むこと。 ・新しい意味を創造すること。 ・利用者と協働すること。

目標にもなっている³。

具体的にエンパワメント実践についてみていくと、例えば英国においてエンパワメントに関して研究を展開している Adams, R.によると、エンパワメントの枠組みとしてエンパワメントの領域もしくはレベルの軸、批判的な反省による実践の程度の軸という2つの主軸を設定しながら構築し、その要素の相乗作用により実践においてエンパワメントが創出される。そして実践におけるエンパワメントは、反省-行動-評価というサイクルの連続と、思考と行動の間の相互作用を意味し、外界や自己に対して批判的である必要性を指摘している (Adams 2003 : 40)。このことから、社会構成主義に基づくソーシャルワーカーの専門性への見直しを含めた自省の重要性が理解できる。

また米国においてジェネラリスト・ソーシャルワークにおけるエンパワメント・アプローチを体系化している Miley, K. K.らは、エンパワメント実践において鍵となる perspective として、①エコシステム、②社会構成主義、③フェミニズム、④ライフコース理論、⑤批判理論を挙げ、理論的枠組みを整理している (Miley ら2013 : 26-31)。これらの理論的枠組みからなるアプローチの構成要素としては、①エコシステム視座の浸透、②社会正義への責任の反映、③ストレングス志向の適用、④利用者との協働、⑤エンパワーしていく現実の構築を挙げ、個人、対人、政治的レベルでエンパワメントを達成することを指摘している (Miley ら2013 : 101-103)。

Miley らのエンパワメント・アプローチは、一貫して利用者がストレングスを持ち、環境が潜在的な資源を保持しており、社会構造が利用者システムと同様に変化しうることを、そして利用者が変化の過程の全ての側面で十分にパートナーとして参加することを仮定したうえで作動する。ソーシャルワーカーが利用者の本来備わっているパワーを支援する時、より好ましい成長への可能性を高める。そして利用者は、潜在能力、統制力、自己実現の進展に向けて努力することが可能とな

る。そのために、利用者システムへの視点、そして利用者への問題への解釈を再検討する必要があることを指摘している (Miley ら2013 : 76-77)。この視点をふまえてソーシャルワーカーは、利用者の知見を認め、利用者のパートナーとなる関係を基礎にした協働により、達成したいと望むことへのビジョンを創造し、そのゴールを実現するための資源を探求することに集中する (Miley ら2013 : 102)。

この関係を通じて展開される過程は、対話・発見・発達からなる局面で構成される (Miley ら2013 : 103-108)。そこでは、従来の問題解決過程のように関係を構築し、目標の定義、状況のアセスメント、それに基づく計画、そして変化に向けた実施という過程で活動を展開する。しかし解決の探求、ストレングスやエンパワメントを強調する言語と概念の利用、すべてのシステムレベルの利用者とのパートナーシップにより、コンピテンスの促進やマクロレベルでの変化の促進に向けて従事する点が対照的である。すなわちこのアプローチは、欠陥よりもストレングスを、問題の発見よりも解決の探求を、過去志向よりも未来志向を、慣例的な指導よりもコンピテンスの促進を、専門的な知識よりも協働的なパートナーシップを、過程を通じて強調している (Miley ら2013 : 110)。

このようにみていくと社会構成主義は、エンパワメント実践において、利用者の生活の捉え方、ソーシャルワーカーによる支援の姿勢、そしてその過程展開に関して、社会構成主義的転換や物語論的転回を基礎に大きな影響を与えている。

3. エンパワメント実践との関連

すなわちこのソーシャルワークにおける社会構成主義は、エンパワメント実践と関連して、

- ①言語を介した会話や対話
- ②多義的な社会構成への関心
- ③専門性に内在する権力の自覚と自省
- ④利用者の生活への見方や意味づけの重視

- ⑤利用者とソーシャルワーカーの協働
- ⑥利用者の病理よりもストレングスの強調
- ⑦問題解決よりも解決構築への過程展開
- ⑧過去よりも未来への志向性

などの特徴を強調しているといえ、その実践展開に意義をもたらしているといえよう。

具体的にまず①については、言語を通じて世界が形づくられるところから、利用者のおかれている差別や抑圧などによるパワーレスな生活状況がいかに知と権力によって構成されているかを問うことが可能になる。その一方で、このパワーレスな社会環境が利用者の言語を通じて脱構築され、再構築可能であることも同時に主張することができる。そのことはミクロレベルの実践では、パワーレスな状況としてのドミナントなナラティヴを会話や対話を通じてオルタナティブなストーリーに転換していくことを可能にしているといえよう。

次に②については、上記とも関連するが、人々の暮らす社会が単一なものとして存在するのではなく、多義的な世界として構成されているとの理解を可能にしており、そのことが利用者のエンパワメントに寄与している。このことは、社会のなかで優勢な当たり前とされている現実疑問を投げかけ、その現実の多義的な解釈を促進することができる。パワーレスな生活状況におかれている利用者にとって、その状況の多義的な意味づけは、社会構造への懐疑や状況に対する異なる解釈から、パワーの発揮を促す契機となる。

③については、利用者との協働に向けたソーシャルワーカーの姿勢である。従来は、ソーシャルワーカー側が利用者の生活状況について、専門的知識から問題を定義し、解決に導くことが専門性として理解されてきた。ソーシャルワークにおいては、様々な専門的知識を用いて利用者をその枠組みから理解できる部分に区分してきた。このように援助する専門職という名のもとに、利用者に押しつけている知識の背後にある権力への自覚を促すことに社会構成主義は貢献する。特にソー

シャルワーカー自らの行為を批判的に省みる自省は、利用者をエンパワメントするという専門職の奢りを統制することができるだろう。

④については、③にみられるソーシャルワーカーの専門性への批判と同時に、その自省から改めて、利用者の生活への専門性を認める立場を明確に位置づけることにつながる。利用者こそ自身の生活への専門家であるという姿勢で、ソーシャルワーカーが関わることへの根拠となるといえよう。特にソーシャルワークでは、かねてから“Starting where client is”というソーシャルワーカーの姿勢が重視されてきたが、それをより一層、明確に位置づけ、利用者の生活への見方や理解からエンパワメントを促進することになる。その際には、利用者も自らとおかれている状況に対する自省をとおして、これまでと異なる現実を構成していくのである。

⑤については、③と④の特徴から生じる利用者の生活への知識や理解を優位にし、その主体性を尊重するソーシャルワーカーの姿勢こそが専門性となって支援を展開することへの裏づけとなる特徴である。すなわち社会構成主義の立場からは、一方で利用者の生活状況や問題への認識、そして生きてきた経験や強さを、他方でソーシャルワーカーのその生活状況を理解する専門的見方と支援過程の展開方法を両者の専門性として認めていく。そしてそれを相互に活かし合い、実践をとおして協働することにより、変化を促す過程を創り出すことが可能になるのである。

⑥について社会構成主義は、従来のFrued, S.の精神分析理論に基づく利用者の病理や欠陥、そして問題に着目したソーシャルワーカー主導による援助への批判的反省からの転換に寄与している。そして利用者の健康や成長へ着目しながら、利用者が自らの人生のエキスパートであることを認識し、その肯定的側面を強調するのである。利用者の希望や長所、そして可能性が利用者ソーシャルワーカーの自省を通じた協働によるエンパワメント実践に向けた中核となるのである。この

ストレングスに着目することは、利用者自身の自己肯定感の向上にもつながり、解決に向けた動機づけと目標達成への行為としてのパワーをより促進することにもなるだろう。

⑦については、利用者の問題に焦点化し、その解決を進めることがソーシャルワーク実践の一側面に過ぎないことを強調している。従来、ソーシャルワークでは、利用者の問題に焦点化し、解決に向けてその原因を追究してきた。精神分析理論では、クライアントの内面の心理的な病理や欠陥に、初期の生活モデルでは、人間と環境の相互作用から生じる生活問題に着目してきたのである。そこからの転換により、問題の原因を探るのではなく、その問題にどのように対処してきたかや、問題を外在化しながらその影響を考えどのように対抗していくか、さらにはどのように解決したいかを考えることに焦点化する。その結果、問題を追求することによる利用者のパワーレス化を回避することができ、問題を特定することに固執することもなく、問題を解決することもなく、解消することを可能にするのである。

最後に⑧については、⑦にみられる解決を構築することに向けて未来志向により協働するという特徴である。望ましい未来について、希望や目的・目標、そして理想像について利用者がどのように考えているか、考えられるかを重視する。精神分析理論では、クライアントの問題の原因となっている過去を探ることに重点をおいてきた。そこでは、過去に遡って生育歴を調査し、特に幼少期の両親などより狭い人間関係における体験からの影響を強調する。社会構成主義は、エンパワメントに向けて、過去志向への転換により未来を描き、創造していくことに寄与しているのである。

4. 課題

最後に、ソーシャルワークにおける社会構成主義に関して、エンパワメントの観点からの課題としては、まず Foucault, M.の思想を基盤とした専門性批判の論説とも重なり、ソーシャルワーカー

主導の援助展開や専門性についてソーシャルワーカーの自省を促す根拠になっていることを起点に考えることができる（例えば Margolin =2003）。このことは、ソーシャルワーカーが利用者をエンパワメントしていくことについて疑問を呈している。また Pozatek, E.が、ポストモダンの影響によって、もはやソーシャルワーカーの状況判断が利用者の経験と同じであると仮定できないことを述べていることから、このようなソーシャルワーカー主導の姿勢への批判について理解することができる（Pozatek1994：399）。加えて Pease, B.らは、モダン思考に基づくエンパワメント概念自体に疑問を投げかけ、エンパワメント自体のポストモダン概念を構築していくことを指摘している（Pease ら1999：156）。以上の指摘からは、改めてソーシャルワークにおいて社会構成主義に基づくエンパワメント実践をどのように形づくっていくかが問われているといえよう。

また一方では、社会構成主義にも批判がみられる。例えば、社会の個人に対する抑圧の側面や、小集団における現実構成の過程に説得的であるが、生活や社会に関するトータルな理解が構成されないこと、特にソーシャルワークでは、個人の認識に偏り、ミクロなレベルにとどまることが問題視されている（Kondrat 2002：439）。またクライアントとセラピストは、それぞれの意味づけに相互に影響しあう存在であり、そのため意味はこうした相互性の副産物である（Anderson ら1992：31）。これらの指摘にみられるように、ソーシャルワーカーとしてどのような意味世界を保持しながら利用者のナラティブについて支援を展開するかという課題がある。

一旦は、どのようなナラティブも語られることを重視することができるが、利用者がソーシャルワーカーの前で何を語るかに依存しており、社会福祉サービスの提供を含めた具体的な生活課題の解決に向けたストーリーが語られることが必要となる場面もあるだろう。一方でソーシャルワーカーが利用者のストーリーを聴き、物語を共同構

築しながら問題を解消していくことはできるかもしれないが、多職種とは異なりソーシャルワーカーとして、どのように構築していくかについて自省していくことが必要となる。その際には、自らと専門性を形づくる意識されていない背後にある大きな物語を自覚していくことが期待される。そのためには、ソーシャルワークがどのような専門職であるかを認識することが課せられているといえよう。その意味では、専門性を排除し、利用者の語りとその語りから構成される利用者自身の生活への専門性を重視しながらも、一方でソーシャルワークの専門性に対して無自覚であることはできないのである。

V. おわりに

ソーシャルワークに新しい潮流をもたらしているこのポストモダンの思想に基づく社会構成主義やナラティブなどの影響により、近年ではソーシャルワークにおけるストレングスやエンパワメントの意義が強調され、さらには再考をも迫られている。それと同時に、社会構成主義に基づくアプローチについても、ストレングスやエンパワメントが実践展開の重要な根拠や目標となっている。この両者は、ソーシャルワークの方法論として相互に発展してきているといえるだろう。特に社会構成主義は、エンパワメントの観点から理論的枠組みとして、①ソーシャルワーカーの専門性への批判と自省、②利用者論理やストレングスの重視、③社会構成主義を基盤におくアプローチの展開、などの点で、大きな影響を与えていると考えられ、そのような意味で意義があるといえる。

しかし一方で、社会構成主義に基づくソーシャルワークのみが展開されると、そこではそれ自体が大きな物語となり、利用者をその言説や物語から構築される構成物に押しとどめることになるとの懸念もあるだろう。ソーシャルワークにおける従前からのエンパワメント実践では、人間と環境の枠組みが特徴となることからエコシステム視座に基づいて生活を考えることも重要となる。そ

の意味では、社会構成主義からエンパワメント概念自体が批判を受けるのかもしれない。

ただこのように、社会構成主義のみで別の見方を排除し、その正当性を主張することは、社会構成主義の見方に利用者を当てはめることになりかねない。ソーシャルワークにおけるエンパワメント実践に対する社会構成主義の意義は、ソーシャルワーカーのもつ専門性を意識せずに利用者と接することこそ、利用者への権力行使につながることにへの批判と自覚を促すことにある。この視点を保持したソーシャルワーカーの反省的・自省的な実践こそが利用者のエンパワメントを促進することを可能にするといえるだろう。

本研究は、JSPS 科研費 26380751の助成を受けたものである。

¹ 本表は、De Jong ら（1995：730-731）の解説をもとに整理した。

² 本表は、Blundo ら（2008：244-248）の指摘をもとに筆者が作成した。

³ De Jong ら（1995）は、利用者のストレングスを引き出すために、解決志向の面接の必要性を指摘している。

文献：

- Adams, R. (2003) *Social Work and Empowerment*, Palgrave Macmillan.
- Anderson, H. and Goolishian, H. (1987) Human Systems as Linguistic Systems : Preliminary and Evolving Ideas about the Implications for Clinical Theory, *Family Process*, 27, 371-393.
- Anderson, H. and Goolishian, H. (1992) The Client is the Expert : a Not-Knowing Approach to Therapy, MacNamee, S. and Gergen, K. J., *Therapy as Social Construction*, Sage Publication, 25-39.
- Anderson, H. (2007) The Heart and Spirit of Collaborative Therapy : The Philosophical

- Stance-“A Way of Being” in Relationship and Conversation, Anderson, H. and Gehart, D., *Collaborative Therapy : Relationships and Conversations that Make a Difference*, Routledge, 43-59.
- Anderson, T. (1987) The Reflecting Team : Dialogue and Meta-Dialogue in Clinical Work, *Family Process*, 26, 415-428.
- Anderson, T. (1992) Reflections on Reflecting with Families, MacNamee, S. and Gergen, K. J., *Therapy as Social Construction*, Sage Publication, 54-68.
- Berger, P. L. and Luckmann, T. (1966) *The Social Construction of Reality : A Treatise in the Sociology of Knowledge*, New York. (= 2003, 山口節郎訳『現実の社会的構成-知識社会学論考-』新曜社.)
- Berg, I. (1994) *Family Based Services: A Solution-Focused Approach*, W. W. Norton.
- Berg, I. and De Jong, P. (1996) Solution- Building Conversations : Co-Constructing a Sense of Competence with Clients, *Family in Society*, 77 (6), 376-391.
- Blundo, R. and Greene, R. (2008) Social Construction, Greene, R. R. ed. *Human Behavior Theory and Social Work Practice*, Transaction.
- Burr, V. (2003) *Social Constructionism*, Routledge.
- De Jong, P. and Miller, S. D. (1995) How to Interview for Client Strengths, *Social Work*, 40 (6), 729-736.
- Gergen, K. J. (1999) *An Invitation to Social Construction*, Sage Publications.
- Hartman, A. (1990) “Many Ways of Knowing”, *Social Work*, 35(1), 3-4.
- Hartman, A. (1991) “Words Create Worlds”, *Social Work*, 36(4), 275-276.
- 木原活信 (2003) 『対人援助の福祉エートスーソーシャルワークの原理とスピリチュアリティー』ミネルヴァ書房.
- Kondrat, M. E. (2002) Actor-Centered Social Work : Re-visioning Person -in- Environment through a Critical Theory Lens, *Social Work*, 47 (4), 435-447.
- Laird, J. (1995) Family-Centered Practice in the Postmodern Era, *Families in Society*, 76 (3), 150-162.
- Lyotard, J. F. (1979) *La Condition Postmoderne*, Les editions de Minuit. (= 1986, 小林康夫訳『ポスト・モダンの条件-知・社会・言語ゲーム-』水声社.)
- MacNamee, S. and Gergen, K. J. (1992) *Therapy as Social Construction*, Sage Publication.
- Margolin, L. (1997) *Under The Cover of Kindness : The Invention of Social Work*, The Rector and Visitors of the University of Virginia. (=2003, 中河伸俊・上野加代子・足立佳美訳『ソーシャルワークの社会的構築-優しさの名のもとに-』明石書店.)
- Miley, K. K., O'Melia, M. and Dubois, B. L. (2013) *Generalist Social Work Practice : An Empowering Approach*, Allyn and Bacon.
- Parker, S., Fook, J. and Pease, B. (1999) Empowerment : the Modernist Social Work Concept *par excellence*, Pease, B. and Fook, J. ed. *Transforming Social Work Practice : Postmodern Critical Perspectives*, Routledge.
- Parton, N. and O'Byrne (2000) *Constructive Social Work : Toward a New Practice*, Palgrave.
- Poulin, J. (2010) *Strengths-Based Generalist Practice : A Collaborative Approach*, Brooks / Cole.
- Pozatek, E. (1994) The Problem of Certainty : “Clinical Social Work in the Postmodern Era”, *Social Work*, 39(4), 396-403.
- Saleebey, D. ed. (2006) *The Strengths Perspective in Social Work Practice*, Allyn and

- Bacon.
- 杉万俊夫・深尾誠（2003）「第3章 実証から実践へーガーゲンの社会心理学ー」小森康永・野口裕二・野村直樹『ナラティブセラピーの世界』日本評論社, 55-71.
- White, M. Epston, D. (1990) *Narrative Means to Therapeutic Ends*, W. W. Norton. (=2017, 小森康永訳『物語としての家族』金剛出版.)
- White, M. (2007) *Maps of Narrative Practice*, W. W. Norton. (=2017, 小森康永・奥野光訳『ナラティブ実践地図』金剛出版.)
- Witkin, S. L. ed. (2012) *Social Construction and Social Work : Interpretations and Innovations*, Columbia University Press.

